

訳者コメント

生活の質改善のための移植はどのような倫理的問題をもたらすか

筒井晴香（東京大学大学院医学系研究科）

本論文、カプラン&パーヴス著「臓器移植の倫理における静かな革命」は、近年確立されつつある「生活の質（quality of life）の改善を目的とした移植」が移植医療の倫理にもたらす変化について、特に「生活の量（quantity of life）と生活の質のトレードオフ」に光を当てて論じたものである。以下では本論文を概括した後、コメントを一点述べる。

臓器移植は、手術自体のリスクに加え、免疫抑制剤の重い副作用というリスクを伴う。心臓移植や肝臓移植など、移植が救命を目的としている場合であれば、他に死亡を防ぐ有効な手段がないことによって、リスクもやむを得ないものとされてきた。しかし、救命でなく生活の質の改善を目的とした移植（手、顔、子宮、ペニス等の移植）の場合、死亡のリスクを伴う手術を生活の質の改善目的で行うという、生活の量と質のトレードオフが発生する。

本論文では、生活の質改善のための移植における生活の量と質のトレードオフについて、三点の倫理的懸念が検討される。すなわち①生活の量と質の共約不可能性、②死亡によって「すべてを失う」リスク、③患者の自律的な判断の阻害である。

①の共約不可能性については、生活の量の価値は結局のところ、その期間の生活の質のよさによって決まるので、量と質は共約可能であるとされる。この議論は、生命の尊厳を重視し、生活の質に関わらず生命自体に価値を置く立場からは拒否

されうるが、本論文では同様な立場の人であっても、非医療的な文脈では量と質のトレードオフをごく普通に行うものと述べられている（交通事故のリスクを負いつつ自動車を利用するなど）。

②の論点は、移植に伴う死亡のリスクは「すべてを失うリスク」に等しく、これは移植しないことで生活の質が低水準に留まるリスクに比べ過大だということである。前者のリスクを生活の量の損失による害、後者を質の損失による害と捉え、両者の大きさを比較衡量しているものと見れば、②は功利主義（帰結主義）的な論点といえるだろう（他方①は、生命の尊厳を重視する議論との親和性という点からは、義務論的な論点といえるかもしれない）。これに対し著者らは、死亡のリスクは「すべてを失うリスク」ではないと論じる。死がもたらす害は「すべてを失うこと」でなく「より長生きしていれば享受できたであろう善の剥奪の害」であり、これは「よりよい質の生活によって享受できたであろう善の剥奪の害」、すなわち、移植しないことによるリスクと比較可能である¹。

③の患者の自律性の阻害の問題については、生活の質改善のための移植において、さまざまな認知バイアスの影響により、レシピエントが移植手術の結果を楽観的に見積もりがちになることが示される。この点から著者らは、移植を希望する患者へのインフォームド・コンセントにおいて十分な注意が必要であると論じる。

結論として、生活の質改善のための移植手術に

伴う生活の量と質のトレードオフにおける倫理的問題は、患者に楽観的な判断を下させる認知バイアスの問題に集約される。

以上が本論文の概要である。続いて、コメントを一点述べる。

著者らは、生活の質と量の比較にまつわる困難(①②)をさほど決定的でないものとして退け、患者の認知バイアスの問題(③)をより重く見る。確かに、移植によって生活の質がどれだけ改善するかを見積もることは容易ではないだろう。だがそれは、必ずしも患者本人の観点から見た評価の問題には留まらないのではないか。生活の質改善のための移植手術は、そもそも新規かつ発展途上の医療技術であるがゆえに、それが患者に何をもちたらしめるかは、医療者の側においても、また広く一般社会においてもいまだ十分に知られているわけではないと考えられる。健常者のケースとの単純な比較は困難であろうし、バイアスが働く恐れもあるだろう(この点はレシピエントの予後に関する追跡調査の重要性にもつながる)。

要するに、移植による生活の質改善の見積もりの困難さは、必ずしも患者本人の観点に限った話ではないと考えられるのである。もしこの見積もりが原理的に一定の困難を孕むものだとすれば、本論文中で検討された生活の量と質の比較における困難の問題は、生活の量と質の差異によるものというよりは、質自体の評価の難しさによる問題として浮上してくることも考えられる。また、そもそも判断が困難な問題に関してインフォームド・コンセントの重要性ばかりを強調すれば、判断の責任を患者に押し付けることになりかねない点にも注意すべきである。

¹ これは死の害に関する哲学的議論における「剥奪説」と呼ばれる立場である。詳しくは以下を参照せよ。Nagel, T. (1979). *Death*. In *Mortal questions* (pp. 1-10). Cambridge: Cambridge University Press. 邦訳, トマス・ネーゲル (永井均訳) (1989). 「死」『コウモリであるとはどのようなことか』(pp. 1-16). 勁草書房; 鈴木生郎 (2011). 「死の害の形而上学」『科学基礎論研究』39(1), 13-24.